

翻訳本『火山島』の版本比較研究

4.3^[1]の意味化を中心に

チャン・ウネ

(姜喜代 訳)

1. はじめに:4.3の「再現」と「物語化」

『火山島』に関わる多くの先行研究は小説の4.3の再現と形象化に集中し、4.3をどう規定するかをめぐる苦心してきた。このように、何をどう再現すべきなのかを選別するプロセスの中で、選択されなかったものが余剰として扱われ、他者化され、選択されたものだけが代表性を獲得するという問題も生じた。こうした状況の中において「移行期の正義(transitional justice)」という概念は、歴史を言表する際に代案的方法を提示することができる⁽²⁾。

移行期の正義とは、民主化への移行とその過程における過去の歴史の清算を中心的課題とする概念であり、地球的レベルの民主化への流れとともにその意味が拡張中の動態的概念であり、最近では「真実・和解を目的とする過去の清算における新たな類型及び正義の代替概念」⁽³⁾という意味が強調されている。移行期の正義は歴史を固定したものではなく流動するものとして理解し、共同体の力量から歴史を再解釈する可能性を模索する。そのため移行期の正義を経由してテキストを読解しようとする試みは、社会の成員による民主化への意志と文

学が会う地点において文学がどのような方法で精緻な想像力を発揮できるのかを見定めようとする意図ともつながっている。

以上の議論を前提とし、『火山島』の2つの翻訳テキストがそれぞれ歴史の特定の時期と密接に絡み合っている点に注目しなければならない。『火山島』(1988)を理解するためには1980年の光州抗争を通じた民主化への熱望の爆発と独裁への抵抗、独裁政権を正当化してきた反共イデオロギーが持つ虚構性の暴露という時代の流れを背景に据えなければならない。一方、『火山島』(2015)は、2003年の4.3特別法の制定、2014年のセウォル号事件と市民倫理の覚醒、2017年の朴槿恵政権の弾劾と広場におけるろうそく革命^[2]などと合わせて考えなければならない⁽⁴⁾。このように『火山島』は時代の変遷の中で、時に抵抗と抗争のテキストとして、あるいは平和と革命のテキストとして読解されてきた。

一方、イ・ジェスは移行期の正義に対する基本的な定義に対してバフチンの概念である「クロノトープ(chronotope)」の接ぎ木を試みている。彼はクロノトープを「作家にあらゆる事態を繋げさせ、作品を形づ

けさせる神経の網のようなものであるが、この概念は過去の精算をめぐる法と運動の解明においても有用」⁽⁵⁾な概念だと論じている。

クロノトープとは時空間を意味するロシア語であるが、バフチンはこれを「文学作品の中で芸術的に表現された時間と空間の間の内的なつながり」⁽⁶⁾を表す用語として使うことで作品と世界、そして作家と作品の間に形成される相互作用を強調する概念としてその意味を拡張している⁽⁷⁾。クロノトープによって具現された世界は「実際の世界の一部となってその世界を豊かにし、その一方では実際の世界は作品が創造されるプロセスの一部として、またその結果、作品が宿した生命の一部として聴衆と読者の創造的認識を通じて作品を絶えず刷新し、作品とその作品の中の世界に浸透」⁽⁸⁾する。物語と現実の間で生まれるこうしたクロノトープ的な交換プロセスの重要性は「なによりもまず、歴史的に発展する社会的世界の中で発生・変化する歴史的空間との接触を常に維持」⁽⁹⁾させるところにある。いわばクロノトープは現実世界と物語を「対話」的關係として再構成する概念であり、ひいてはこれを通じてすでに物語化された対象である歴史と、変化しつつある世界との連結を誘導する概念として理解することができるだろう⁽¹⁰⁾。

この時、移行期の正義を導き出す方法論としての「対話」は、時・空間を超越する市民・大衆の連帯として結実する。移行期

の正義は概念上の定義 (definition) に暗示されているように、参加者の遂行性を前提とする。移行期の正義を実現させたいと願う社会成員の意思は1つの事件を特定の事態に極限して意味を矮小化させまいとする努力の中で様々な局地的事件を媒介することで自発的に歴史的意味を生成し、ひいては歴史を移行期の正義実現という巨大な流れとして再構成する。移行期の正義とクロノトープの接ぎ木が現実において意味するものとは、歴史の解釈に対する成員の積極的かつ自発的参加による対話的状况であり、これにより創出される生き生きとした歴史の意味化プロセスである。

こうした理解は『火山島』の2つの翻訳本にも適用可能である。2つのテキストをクロノトープ的方法で読解する事は各テキストが位置する様々な時空間を重ねて見ることを意味する。特定の時間に固定されている各々のテキストは「対話」を通じて指定された物理的時間性から脱却し、「歴史」という直線的時間概念を攪乱させ、新たに創出された「対話的」時間の中で前衛を生成することができるのである。

2つのテキストは1980年代と2000年代という異なる時期の政治的パトスの中で翻訳されており、テキストの意味もまた各々の政治的磁場の中で形成された。こうした文脈で作品を解釈する際に2つの問いが持ち上がる。まず物語の内在的側面で移行期の正義が何によって達成されたのかという問いである。またもう一つの問いは、現在、

そして未来の観点から、移行期の正義へどう移行していくのかという問いである。2つの問いはどちらも文学と現実の相互浸透性に対する考察の中で、前者はテキスト解釈の領域を、後者は意味生成の領域を問題化していると言える。特に後者の場合は各々のテキストの分析からもう一步踏み出して積極的な意味づけを目的とする。こうした問題意識の下、本論文では歴史をどのように構成するのかをめぐり、現在性の中で問いを投げかけ、それに対する答えを求めたいと思う。

以上を元にこの論文で扱うテキストはイ・ホ Chol、キム・ソクヒの翻訳で実践文学社から出版された『火山島』(1988)とキム・ハクトン、キム・ファンギの翻訳でポゴ社から出版された『火山島』(2015)である。現在まで移行期の正義という観点からこの2つのテキストを共に扱った研究は皆無であった⁽¹¹⁾。そのためこの論文は2つのテキストを共に読むという新しい方法を提示するという点でも意義深い試みとなることを期待する。

2. 「呼びかけ」と「応答」としての『火山島』の受容

『火山島』は特定の時代状況との緊密な連携の中で受容されてきた。特に『火山島』(1988)は独裁政権に対する抵抗と民主主義の追求という歴史的使命と共鳴し、その意味を形作ってきたが、こうした状況は『火山島』(1988)の作家による序文からも確認できる。

『鴉の死』や『火山島』等の「済州島 4.3 事件」を扱った小説が我が国の言葉に訳され、広く読まれることになるとは想像もしていませんでした。拙作が祖国で翻訳紹介され、堂々と日の目を見るという望外の現象は、実はそれは望外のことではなく、民主化へと向かう胸がいっぱいになる時代の流れの中で行われたことであり、またこの過程で時代の制約を恐れず振り払いながら進んだ出版関係者の皆様の情熱の産物でもあります。(『火山島』第1巻、(1988)、2頁。)

金石範は『火山島』(1988)が韓国に紹介され得た背景を、韓国における民主主義への移行に対する熱望であったと解釈する。また作家は、『火山島』(1988)の翻訳を否定的な時代的制約性を突き抜けるための一種の実践的抵抗だと捉えている。また金は「とにかく、日本語で書かれたこの作品がわが国の言葉に翻訳された今、これが韓国の民族・民衆文学の大きな流れの中に一筋の水となって合流することができるのであれば著者として最高の喜びです」⁽¹²⁾との感想を述べているが、これを通じて作家が『火山島』(1988)の韓国への紹介を民族・民衆文学という地平で捉えていることが確認できる。

これと関連し、80年代の民主化抗争の中で民主的価値実現を積極的に模索していた時代の雰囲気と、その中で民衆的意志として呼び出された4.3の立ち位置について考えてみたい。金石範もこれに関する認識を

多くの紙面で明らかにしている。

4.3 事件をこの国の歴史に定着させるためにはまだ長い年月が必要だ。1980年5月の光州虐殺以来、ついに反米の機運が韓国に定着し始めたが、解放直後の南朝鮮においてアメリカ帝国主義の本質が再び注目される日が早晚訪れるであろう…(強調は引用者)(『火山島』第5巻、(1988), 318-319頁。)

そこで結局四・三事件が起こった。

これは私に言わせたら「義拳」ですよ。八八年十一月、韓国へ四十何年ぶりに行ったけど、その時私は、「四・三は「暴動」ではなく、「民族解放闘争」である」と言っ
てまわった。義拳であって、冒険主義であった。(強調は引用者)(金石範・金時鐘、『なぜ書きつづけてきたかなぜ沈黙してきたか』、2001、172頁)

ここで注目すべきは、反米帝国主義に対する対抗言説として4.3が位置付けられている点と80年代の光州民主化抗争の延長線上で4.3が思惟されている点である⁽¹³⁾。上の発言を通じて作家もまた反米帝国主義に対する民族主義的抵抗、統一と民主化に対する熱望など、当時の時代ムードと共鳴していることが確認できる。また4.3を反米帝国主義に対する抵抗と民主化への熱望を媒介するつなぎ目として捉え、さらには2つの認識が重なる磁場の中で分断体制に対する問題意識を呼び起こしているのが特徴的である。

だが金は、時間の経過と共に『火山島』が民主主義への移行を早めるテキストとしてのみその意義が限定されることについて批判的認識を吐露している。そのため、過去『火山島』(1988)に恣意的な改作がなされたことに対して『火山島』(2015)の序文で遺憾の意を表明している。

ところで、1988年に出版された韓国語版『火山島』第1部は内容上(当時日本にいた著者と出版社間の連絡が難しかったため)不十分な部分が少なくない。一つは、**翻訳版が原作とは異なり日記体形式にされてしまい、作中の重要な場面が所々省略されたため**、その後完結した『火山島』第2部とのつながりに支障を与えている。

おおよそ、**作品の内容への批評も政治的・教条的な解釈がほとんどである**。一例を挙げるならば、**作品全体の中心軸となる主人公の李芳根を「反革命的な」人物として批判しているため、全体的な作品理解の上で相当な乖離をもたらしているのだが、こうした点が原作者として残念である**。[中略]おおよそ当時の『火山島』評は、韓国文学界にはこの作品への文学的受容力が欠けているのではないかとの疑問を私に抱かせたことは間違いない。最近、以前とは異なる見方で『火山島』を論じたキム・ジェヨンさんの書評が出たことで、それまでの政治・教条的な偏向がかなり是正され、克服されたように思う。(強調は引用者)(『火山島』第1巻、(2015), 5-6頁。)

作家は1988版の任意的改作について指

摘し、テキストが政治的・教条的文脈で解釈されてきたことを批判する。さらに作家は政治的枠組みから脱却し、他の方法でテキストを見つめることを要求する。彼が新たに提示するアジェンダは「平和」、「普遍」、「革命」である⁽¹⁴⁾。こうした転換は2003年に盧武鉉大統領の談話と真相究明調査報告書の発行を起点として変化した4.3に対する認識の新しい流れと軌を一にしていると言える。ここで目立つ傾向は、人類の普遍としての「平和」の強調である⁽¹⁵⁾。こうしたムードの中、『火山島』(2015)も「平和」に応答するテキストとして積極的に位置づけられることになる⁽¹⁶⁾。

一方、4.3の再発見におけるもう一つのキーワードは「革命」である。4.3を革命として位置づけようとする試みは新しいものとは言えないが、最近になってこの事件に対する最終的な定義としての「革命」ではなく、より流動的で幅広い意味としての「革命」が登場している点が注目値する。そしてそれは歴史的・現実的次元では失敗したかもしれないが、現実の敗北を復活の可能性に転換しようとする転覆的想像力の所産であり、それに対する実践としての革命である。こうした解釈の転換は、最近我々が経てきたいくつかの意義深い経験と重ね合わせて見たときに意味や形態がいっそう鮮明となる。

2014年のセウォル号事件⁽¹³⁾に触発された正義実現への欲求、新たな民主主義に対する渴望、共同体の成員としての市民的倫理意識の覚醒、そして腐敗した権力に対する

社会成員による審判としての2017年のろうそく集会は、民主主義を牽引する共同体の貴重な資産であり、革命に対する想像力を動かす原動力となった。こうした経験を通して我々は4.3を過去の失敗した革命ではなく、現在と未来をつなぐ、到来する革命として読み解く力を育んだのである。

一方、2つのテキストが占有した各々の時間帯は独立したタイムラインを構成しているように見えるため、互いに断絶しているような印象を受ける。だが各々の時間帯は断面のように別々に分離してはおらず、かといって線的につながっているわけでもない。むしろ、それぞれの時間帯は『火山島』を媒介として互いに交差している。4.3をめぐる時空間は因果律でつながった直線的な歴史ではなく、4.3を交差する様々な認識が互いに競合し、交渉する中で形成された複合的な時空間である。一つ一つの時間帯はそれ自身を代表する固有の解釈を持っており、また『火山島』というテキストの総体的な意味作用にも関与する。これは一種の対話的ネットワークでつながったヘテロトピア的な時空間である⁽¹⁷⁾。こうした空間から『火山島』の様々な意味づけ作用が発現する。さらにこうした時空間は、大韓民国の近・現代史という直線的なタイムラインの隙間に入り込み、様々な形で移行期の正義の足跡を残す。こうしたプロセスの中で『火山島』は呼びかけに対する応答として歩をさらに進め、自ら意味を生成するテキストとなるのである。

3. 形式としてのクロノトープ:「正名」⁽¹⁴⁾

から「革命」へ

各々別の時期に翻訳されたテキストの構成と内容上の変化、それによる結果と効果について問うことは2つの翻訳版が反映する時代の断面を確認する作業でもある。さらに、各時代の政治的要求に応じてテキスト上に発現する特徴とそれらの差異を中心に2つのテキストを比較することは、作品を媒介として展開するディスコースの系譜学的痕跡を探ることに等しい⁽¹⁸⁾。こうしたプロセスを通じて43の歴史が革命として意味付けされる過程について深く掘り下げていけるのではないかと期待する。そのためこの章では、時間によって変化する2つのテキストの形式と構成の違いに注目してみたい。

『火山島』のテキストを比較する際に真っ先に気が付くことは、完訳本である『火山島』(2015)とは異なり、『火山島』(1988)は計2部構成の『火山島』の第1部しか扱っていないことである。これは、第1部が翻訳された1988年当時、日本ではまだ『火山島』第2部の執筆が終わっていなかったことを考えると致し方のない面がある⁽¹⁹⁾。内容的な差異の次に目に付くのは形式上のそれである。『火山島』(2015)が元となるテキストと同じく、これといった仕掛けなしに、単に数字による章区分がなされているのに対し、『火山島』(1988)は小説の各章、節を日時で区分し、日記形式に加工されている。これは原作にはない部分であり、『火山島』(1988)だけに見られる加筆である。

テキストに対する解釈の差異は、主に後者の理由によるものだと言える。そのためこの章では1つ目の差異ではなく、2つ目の差異について、上で言及した内容を中心にその原因と差異がもたらす効果について論じたい。さらにはテキスト分析を通じて、こうした差異が、『火山島』というテキストが移行期の正義を実現する上でどのように関与しているのかを具体的に見ていこうと思う。

『火山島』(2015)第1部は序章と12の個別の章から構成されており、各々の章は小節に分けられている。一方、『火山島』(1988)の章、節の区分は『火山島』(2015)年とほぼ同じだが、時間の順序にしたがって各々の小節に細かい日時が付け加えられ、日記形式に加工されているという特徴を持つ。また、第1部の最後の方に当たる第11、12章では1つの節が全て、または1節の一部が省略されているのだが、これも『火山島』(1988)の大きな特徴である。

まず、『火山島』第1部に限定し、『火山島』(1988)の章、節区分を整理すると以下の表となる。

表から確認できるように、『火山島』(1988)は各々の節に日付や具体的な時間帯を記載して細かい時間区分をほどこしており、その結果、物語の細かいタイムラインが浮かび上がる。これに対して『火山島』(2015)の章、節の区分は、単に節を数字で表記す

第一部 序章

第1章 1948.2.26	第1節: 1948.2.26 / 第2節: 1948.2.26 正午頃 / 第3節: 1948.2.26 午後 / 第4節: 1948.2.26 夕方 / 第5節: 1948.2.26 夜
第2章 1948.2.27.~3.1.	第1節: 1948.2.27 / 第2節: 1948.2.27 午後 / 第3節: 1948.2.27. 夜 ~28. 午前 / 第4節: 1948.2.28. 正午頃 / 第5節: 1948.2.28. 午後 / 第6節: 1948.2.29. / 第7節: 1948.3.1.
第3章 1948.2.26.~3.4 午後	第1節: 1948.3.2 / 第2節: 1948. 3.2 夕方 / 第3節: 1948. 3.2. 夜 / 第4節: 1948.3.3 / 第5節: 1948.3.3. 夕方 / 第6節: 1948. 3.3. 夜 ~4. 午前 / 第7節: 1948.3.4. 正午頃
第4章 1948.3.4. 午後 ~3.5.	第1節: 1948.3.4. 午後 / 第2節: 1948. 3.4 夕方 / 第3節: 1948. 3.4. 夜 / 第4節: 1948.3.4. 夜 / 第5節: 1948.3.5.
第5章 1948.3.5. 夕方 ~3.13.	第1節: 1948.3.5 / 第2節: 1948. 3.6~7. / 第3節: 1948. 3.8. / 第4節: 1948.3.9. / 第5節: 1948.3.10 / 第6節: 1948. 3.11. / 第7節: 1948.3.11. 夕方 ~12. / 第8節: 1948.3.13.
第6章 1948.3.15. 夜 ~3.25.	第1節: 1948.3.15. 夜 ~16. 正午頃 / 第2節: 1948. 3.16. 午後 ~18. 午後 / 第3節: 1948. 3.18. 夕方 / 第4節: 1948.3.18. 夜 ~20. 正午頃 / 第5節: 1948.3.20. 午後 / 第6節: 1948. 3.21. 午前 / 第7節: 1948.3.21. 午後 / 第8節: 1948.3.21. 夜 ~25.
第7章 1948.3.25. 午後 ~3.28.	第1節: 1948.3.25. 午後 / 第2節: 1948. 3.25. 夕方 / 第3節: 1948. 3.26. 午後 / 第4節: 1948.3.26. 夕方 / 第5節: 1948.3.27. 正午頃 / 第6節: 1948. 3.27. 夕方 / 第7節: 1948.3.27. / 第8節: 1948.3.28.
第8章 1948.3.29.~4.1.	第1節: 1948.3.29. / 第2節: 1948. 3.30 / 第3節: 1948. 3.31. / 第4節: 1948.3.31. 午後 / 第5節: 1948.4.1. 午後 / 第6節: 1948. 4.1. 夕方 /
第9章 1948.4.2.~4.3.	第1節: 1948.4.2. 午前 / 第2節: 1948.4.2. 正午頃 / 第3節: 1948.4.2. 午後 / 第4節: 1948. 4.2. 夜 ~3. 午前2時 / 第5節: 1948.4.3. 午前 / 第6節: 1948. 4.3. 午後 /
第10章 1948.4.4.~4.5.	第1節: 1948.4.4. 午前 / 第2節: 1948.4.4. 午後 / 第3節: 1948.4.4. 午後 / 第4節: 1948. 4.4. 夜 ~5. 午前 / 第5節: 1948.5.4. 午後 / 第6節: 1948. 4.5. 夕方 /
第11章 1948.4.6.~4.14.	第1節: 1948.4.6.~8. / 第2節: 1948.4.11.~12. / 第3節: 1948.4.13.~14. /
第12章 1948.4.20.~5.10. 総選挙前夜	第1節: 1948.4.20. / 第2節: 1948.4.22. / 第3節: 1948.4.23. / 第4節: 1948. 4.24. / 第5節: 1948.4.25.~26. / 第6節: 1948. 5.10 総選挙前夜 /

るにとどまっておき、『火山島』(1988)に比べて至極シンプルであり、そのためタイムラインが可視的に表示されない。『火山島』(1988)のこうした物語装置は、特定の効果を伴ってテキストの解釈に影響を与える。

『火山島』(2015)は第1、2部を合わせて、200字詰め原稿用紙で約2万2,000枚にもなる膨大な分量の小説なのだが、この膨大な量に比して展開する事件はそれほど多くなく、小説の物語上の時間も2年程度と比

較的に短い。このように分量に比べて事件が少ないため、『火山島』の物語上の時間はゆっくりと濃密に展開し、非常にびっしりとした叙述となっている。密度の高い叙述は人物の心理描写、意識の展開、事件や状況に対する分析、事態への背景説明などに割かれている。上記のように、時間の経過の原因である事件の進行に比べて、上述の諸要素に割かれる分量が相対的に多いことも『火山島』の叙述上の特徴だと言える。

こうした濃密に構成された物語上の時間は、事件がなかなか進まない一方で、ある状態に長くとどまりながら特定の事態や局面に対する深度ある解釈と認識を可能にする要因として作用している。『火山島』において4.3をめぐる多様な論点が浮かび上がるのも、こうした形式上の特徴の効果である。こうした濃密な時間は『火山島』の主題の形象化とも密接な関連を持っている。

一方『火山島』(1988)は、上記のように境界がなく緩やかに流れる物語を時間の経過を基準にして分節する。これは節を区分はするものの数字でシンプルに表記する以外にこれといった仕掛けのない『火山島』(2015)と比べると大きな差異だと言える。『火山島』(2015)は全般的に、主人公、李芳根の事態に対する認識と意識に沿ってストーリーが自然に展開していくという傾向がある。一方、『火山島』(1988)は、日時で節を区分して小説を「日記形式」に加工している。こうした加工は作品の意味付けに多くの影響を与えているため指摘しておく必要がある。

節が変わるごとに日時を記載するという日記形式への加工は、『火山島』(1988)がフィクションではなく、事実に基づく記録物であるかのような印象を与える。こうした仕掛けにより物語の事実性と真実性が浮かび上がり、ひいては4.3に実在する事件としての権威が付与される。こうした物語装置は、4.3という重大な事件への没入の度合い

を高めるという効果がある。だが、これが持つ限界は、自然な物語の流れを人為的に分節し、時間では捉えきれない意識の流れを区切ってしまうところにある。その結果、「革命」をめぐる展開する複数の意識の自由な対話的エネルギーと可能性が弱まってしまう。

こうした『火山島』(2015)と『火山島』(1988)の形式上の特徴は何に由来しているのだろうか。これは本稿の第2章で言及したように、『火山島』(1988)年が翻訳・紹介された当時の時代的要求と関係がある。これと関連して本稿では、特に訳者との関連性に注目してみたいと思う。4.3をめぐる複雑な事態の数々について幅広く考慮するというよりも、これらを1つの軸として整理しようと試みている『火山島』(1988)の特徴は、訳者の政治的動機に呼応した結果による産物であるとの解釈が可能である。

『火山島』(1988)の訳者は『小市民』⁽²⁰⁾の作家であるイ・ホ Chol と済州島出身の翻訳家、キム・ソクヒである。このうち注目すべきはイ・ホ Chol である。韓国戦争⁽¹⁵⁾の当時、学徒兵として人民軍⁽¹⁶⁾に召集され、6.25戦争⁽¹⁷⁾に参戦した後、国軍⁽¹⁸⁾の捕虜となり、南韓⁽¹⁹⁾に定着した⁽²¹⁾イは、韓国に定着してからも、韓国の反共的なムードの中で思想的/陣營的真偽を絶えず疑われた。イはこのように、南北の2つの体制を両方経験している脱北作家であり、失郷民であり、境界人でもある。イ・ホ Chol の作品世界は特定の体制やイデオロギーを擁護せ

ず、イデオロギーからの「自由」の中で「民族」の「統一された祖国」を志向するのが特徴である⁽²²⁾。こうした訳者の認識は金石範に通じるものがある。

金石範は朝鮮籍^[11]を維持する理由について、「私には「北」も「南」も祖国ではない。したがって「北」の国籍も「南」の国籍も取得しない。統一祖国が私の祖国なんです⁽²³⁾と述べているが、このように4.3と分断を引き起こした国家の暴力に抵抗しながら国家やイデオロギーに振り回されず、統一された祖国を志向するという感覚は両者に共通している。

こうした側面から、『火山島』(1988)の物語構成が特にクローズアップしている4.3と5.10の南韓単独選挙の意味をさぐる糸口を見出すことができる。4.3は祖国の分断を防ぎ得た革命的義挙であった一方で、5.10に行われた南韓単独選挙は、祖国統一の希望を奪いさった否定的事件である。4.3に対するこうした認識は、事件に正しい名前を付けようとする具体的な欲望に通じている⁽²⁴⁾。その結果、4.3は「革命」と位置付けられたが、それは4.3を定義しようとする「正名」⁽²⁵⁾であり、本当の意味の「革命」ではなかった。事態への定義がなされただけであり、「革命」の核心というべき未来への展望が欠乏していたためである。

4. 括弧付きの(無)意識：省略の逆説とクロノトープ

『火山島』(1988)年の物語は、事実関係中心の叙述と事件の進行に重点が置かれてい

る。これにより事件と人物等に対する部分的省略や削除がみられるが、こうした省略は内容上、4.3の勃発以降に行われており、分量的にも小説の後半部分にあたる第11章と第12章で顕著である。一方、内容面から見ると、主要人物とエピソードの省略が目につき、心理描写や意識の展開、状況伝達や単なる叙述等、事件の進行に影響を与えない部分の省略も確認できる。

このうち本章では『火山島』の中心テーマである革命に関わる主要なエピソードの省略について論じたいと思う。これにより、不在によって逆説的に現れる物語の(無)意識がどの地点を指しているのか、そしてこうした省略が『火山島』の4.3という中心的物語に与える影響について考察してみたいと思う。

『火山島』(1988)から消えてしまった複数の場面は、物語の表層に隠された(無)意識を外部に突出させる。こうした内容と場面の省略の中で最も目立つのは「郵便局事件」と呼ばれる、青年ゲリラによって実行されたが失敗した闘争事件である。郵便局事件の大まかな内容は以下の通りである。5.10単独選挙に反対して郵便局にビラを撒く作戦を実行するのだが、計画が失敗したため作戦に参加したゲリラ青年2人のうち1人が現場で逮捕され、残る1人は逃亡して身を隠したが、李芳根の手助けにより日本に密航する。

『火山島』(2015)では、郵便局は事件の展

開プロセスや事件をめぐる周辺の状況等が複数回言及され、重点的に扱われている。だが、どういうわけか『火山島』(1988)ではこの郵便局での場面に関連する叙述が全て消されている。この省略は、運動の道徳性が絶対視されていた時代ムードの中、ゲリラによる「密航」へのタブー視が作動したからではないかと推測される。これとよく似た状況により削除されたもう一つの場面は、李芳根のソウルでの行動と関係がある。

『火山島』の物語は「済州 4.3」に集中している。だからといってそれが済州と 4.3 以外のものを排除しているという意味ではない。むしろ『火山島』においてこうした周辺的な出来事が描写されることで 4.3 への理解がさらに豊かなものになる。特に、ソウルの政治・社会・文化的風景は 4.3 と有機的に絡み合い、4.3 を立体的に浮かび上がらせる。だが、『火山島』(1988)では李芳根のソウルでの行動の描写が少なくなっている。それにより、4.3 をめぐる豊かな政治・社会的な含意が失われ、結果的に 4.3 が立体的に浮かび上がらないのである。

4.28 の平和会談の決裂を始めとする 4.3 の破局については、大韓民国政府の樹立を控えたソウルの雰囲気から分かなければその真相把握は不可能だ。なかでも問題なのは、李芳根と彼の妹の李有媛(イ・ユウォン)、そして有媛の友人の趙英夏(チョ・ヨンハ)が飲食店で一緒に食事をする場面である。

[1988]

そのネオンが輝いている通りには様々な飲食店が並んでいた。彼ら三人はある飲食店に入った。かなり広い店だった。彼らは入り口近くの席に座り、壁際に李芳根が座り、その向かいに有媛と趙英夏が並んで座った。鍋料理と刺身を注文し、李芳根は酒を、そして有媛と趙英夏はビールを飲んだ。(『火山島』第 5 巻、1988, 201 頁)

[2015]

そのネオンが輝いている通りに中華料理店や洋食レストランなどの多くの飲食店が並んでいたが、三人は一軒の朝鮮料理店に入った。そこは焼肉を主とした一般の朝鮮料理の他に、日本のすき焼風を取り入れた鍋料理をやっていた。

かなり広い店内の一階は入口から半分ほどはテーブルを据えたフロアで、奥はかつては畳部屋だったのを絨毯敷きに替えて座卓をいくつか置いてあった。その一方は、壁際に日本の囲炉裏式に床を矩形に掘って長いテーブルを据え、いわば椅子に腰を下す要領で座るようになっていた。もちろん靴を脱がねばならぬが、テーブルに座るよりそのほうが落ち着いて楽である。(『火山島Ⅲ』、1983, 401)

上の 2 つの引用で最も際立つ特徴は、2015 年版にはあって 1988 年版にはない「日本のすき焼風を取り入れた鍋料理」と「囲炉裏」などの日本風の表現と和式文化に対する李芳根の態度である。日本式座卓の方がテーブルより楽だとの彼の発言は、李承

晩政権の発足を控えて反民族行為特別調査委員会¹²¹が国民的アジェンダとなっていた解放後の政治状況や民衆・民族主義が共同体のビジョンとなり、植民地支配の過去に対する清算要求が高まっていた1980年代の社会状況から見ても明らかに問題적이다。

こうした問題もあるが、飲食店の場面で真に注目すべきなのは、「独立した被植民地人」の自己分裂的な内面風景である。生活の中の日本の残影が植民地支配の痕跡であることを知りつつも、慣れ親しんだものに思わず気楽さと親しみを覚えてしまう李芳根の感覚は、体は解放されたものの、心はいまだに植民地支配の呪縛から逃れられていない「独立した被植民地人」の持つ矛盾を帯びた内面を如実に示している。

こうした自己分裂性への告白とそれに対する省察、そしてその克服への意思は、それ自体が強力な革命への動機となるため一層重要である。存在論的側面における革命は、自己の矛盾を克服・統合して、より高い次元のわたしへと飛躍するプロセスである。ゆえに飲食店の場面は、植民地支配が残した精神的な傷跡を指摘すること以上の意味を持っていると言える。宿命的に襲ってきた内面の葛藤との和解のプロセスを経て、革命としての4.3は存在論的かつ哲学的な意味さえも内包するに至るのである。

これと同様の文脈で、「西北¹²³に十万^{ウォン}円を寄附する」という箇所にも注目が必要だ。これは現実問題に関与すべきだとの指摘を受けた李芳根が、その応答として自身

の財産を処分し、ゲリラと西北に十万^{ウォン}円ずつ寄附することを約束するという内容である。『火山島』(1988)にはゲリラに十万^{ウォン}円を寄付するという内容はあるが、西北にも十万^{ウォン}円を寄附するという内容は含まれていない。

[1988]

李芳根は端的に、いますぐは無理だが、五月中旬には十万^{ウォン}円の寄附をすると約束した。彼はしかしその後のことについては触れなかった。財産を整理する気持には変りないのだが、それはそう簡単でない、そして時間のかかることであり、また迷いが無いのでもなかった。一昨夜、梁俊午にその話をしかけたのも、もちろん自分が決めるべきことではあるが、実際に彼の意見も聞いてみたかったのである。大げさにいうなら、人生における危険な冒険、十年、二十年ではなく、たとえ一年、二年であっても人間が生き長らえているその生活の局面に危機的にやって来る冒険に、自ら身を曝すことに違いなかった。李芳根は昼まえに席を立った。診察室へ顔を出し、診察中の高元植に軽い挨拶をして別れた。(『火山島』第5巻、1988, 248-249頁)

[2015]

李芳根は端的に、いますぐには無理だが五月中旬には十万^{ウォン}円の寄附をすると約束した。彼はしかしその後のことについては触れなかった。財産を整理する気持には変りないのだが、それはそう簡単でない、そして時間のかかることであり、また迷いがな

いのもなかった。一昨夜、梁俊午にその話をしかけたのも、もちろん自分が決めるべきことではあるが、実際に彼の意見も聞いてみたかったのである。大げさにいうなら、人生における危険な冒険、十年、二十年ではなく、たとえ一年、二年であっても人間が生き長らえているその生活の局面に危機的にやって来る冒険に、自ら身を曝すことに違いなかった。十^{ウォン}万円は、「西北」^{ソブク}との示談金に合わせたのではなかったが、それと同じ金額だった。いずれ「西北」にもいくらか色をつけねばならぬだろう。普通預金では間に合わなくなるので、定期を下さねばならなくなる。カネの出が激しいと父に知れることであり、たとえ父には関係のないことでありながらも、変に思われる懼れがあった。気狂い沙汰以外のなにこともない財産の処理についても、父との対応が問題になるだろう。いや、父だけではない。問題は多い。しかし、事は問題の有無如何の上にあった。

李芳根は昼まえに席を立った。診察室へ顔を出し、診察中の高元植に軽い挨拶をして別れた。(『火山島』、第5巻、2015, 253-254頁)

『火山島』(1988)から「西北に十^{ウォン}万円を寄附する」という内容が省かれたのは、こうした内容が受容されにくかった時代のムードが反映されているからだと推察できる。だが省略の原因を推測することよりもっと重要なことは、省略された場面が4.3の意味づけにどう作用しているのかを把握することである。

まず注目したいのは、李芳根の財産処分

の持つ意味である。彼にとって財産は安定した生活基盤である一方、それによって現実の問題に消極的な対応をさせる障害物でもある。李芳根はそうした財産を整理することで自身の階級的限界を克服し、さらには現実関与のための具体的な方法を模索しようとする。このように財産の処分は彼にとって現実への関わりと革命の進路を模索するプロセスの一環である。このように、革命への模索としての財産処分が問題であったなかで、ゲリラと西北に各々十^{ウォン}万円ずつ寄附しようと考えたことが重要である。

『火山島』における金の流れは、現実に対する李芳根の認識と態度を示している。誰よりも現実を批判的に見つめていながらも、いざ現実に参加することには消極的だった彼は、彼なりの方法で革命を模索する。そうして彼は組織の論理ではなく、個人の実存的動機から作動する革命について語るのである。さらにその一環として、自身が持つ全てをはたいて革命の可能性と交換する「身代つぶし」の思想を展開する。だが、その具体的な方法がない状態のなか、苦肉の策として選択したのがゲリラと西北に十^{ウォン}万円ずつ寄附するという構想だったのである。このように「ゲリラと西北に十^{ウォン}万円ずつ寄附をする」という現象の裏には、革命の失敗とそれに対する現実的代案の不在という八方塞がりの状況の中で、彼なりの突破口を模索しなければならないという切迫感と、とにかく双方に出す金の額を揃えることで現実の要求から逃避しようとする

る、矛盾に満ちた欲望が衝突している。

李芳根は 現実参加への義務感とそこから顔をそむけたいという回避意識の間で葛藤する。そうした中、自分だけの革命の道を発見する。それは処分した財産で韓一号を購入し、下山したゲリラを日本に逃亡させるという型破りな計画である。これは否定的な現実に屈服することと、(党)組織の権威とイデオロギーの奴隷に転落することのどちらでもない。一方、それは(党)組織の立場から見れば「反革命」なのだが、歴史の不正義に抵抗する一人の人間の実存的闘争という側面においては「革命」である。こうした西北に十万円(ウォン)を寄附するという内容において注目すべき点は、それが前衛的革命の想像力が発揮される弁証法的プロセスの一部だということである。

以上で見てきたように、『火山島』(1988)が省いた各々の場面は、「革命」に対する思惟をより立体的にしている。このように、省略された各場面の存在感は決して小さくないにも関わらず省かれてしまった。またこうした省略は『火山島』が持つ革命としての含意を結果的に貧弱にしている。『火山島』(1988)の省略は、一面では革命としての4.3を明確に現してもいるが、皮肉なことに、4.3を革命として際立たせようとする戦略がかえって4.3を矮小化してしまっている。こうした理由により、『火山島』(1988)から革命としての4.3の真骨頂を読み解く事は難しいと言えるのである。

5. 革命の深化：「虚無」から「普遍」へ

李芳根の自殺という『火山島』の結末は、革命としての4.3に対する思惟を物語的に完成させる重要な部分である。この章ではこうした事実注目し、小説の結末がいかにして革命としての4.3を意味付けしているのかについて考察したいと思う。

『火山島』は主人公、李芳根の自殺で幕を閉じるが、小説のこのような結末は、文芸春秋で単行本として刊行された時に変更されたものである。文芸春秋版『火山島』(1997)を底本とするポゴ社版の『火山島』(2015)にも彼の自殺という結末が描かれているが⁽²⁶⁾、この章で注目したいのはまさにこの箇所である。李の自殺という物語の結び方は、作家が『火山島』のテーマについて語った「虚無と革命 - 革命による虚無の超克」⁽²⁷⁾という思想的主題として具体化し、ひいては失敗した革命という虚無主義を克服して生成的兆候を凶る革命としての4.3を再び思惟させるがゆえに重要なのである。

李芳根の自殺が提起する複雑な問題意識は、『火山島』の物語が細かく積み重ねてきた対話的状况によって触発される。その意味で小説の終盤、彼が自殺する場面は、『火山島』の物語的な力量が凝縮され、爆発する地点だと言える。また、『火山島』の結末は4.3と革命をめぐる哲学的意味と、この事態に参加する人々の実存的苦悩が

「生成としての革命」に昇華する地点でもある。

右手の山地台^{サンジ}から徐々に盛り上がった沙羅峯の向こうは、削り立った断崖の下の海だ。

殺戮者たちが勝利者として都^{ソウル}へ凱施したあとの、廃墟の曠野を渡る風のなかに虚無があるか。島を蔽う死骸が虚無を否定する。死の廃墟に虚無はないのだ。はるか高原の、なおはるかに、初夏の陽光にぎらつく不動の海が見える。

青い虚空に、銃声が響いた。(『火山島Ⅶ』、1997、511)

結末で提示される「死の廃墟に虚無はないのだ」というメッセージは、「虚無から再生を見いだせるか」という矛盾に満ちた問いを触発する。こうした問いに直面するとき、革命の失敗への責任と現実における敗北を乗り越える代案として、歴史を描く際の革命的想像力が要求されるのである。こうした観点に基づいて『火山島』のラストシーンを分析したいと思う。

特に李芳根の自殺に関わる複数の断想のうち、殺害と自由、または自殺をめぐる極限的認識論の展開が際立つ「私問」をめぐる観念的苦闘について重点的に見ていきたいと思う。これを通じて生成としての革命のあり方を考えてみたい。

なぜ、やつらを殺せないのか。なぜ殺され続けているのに、殺せないのか。無力以

外のものではない。殺すことは怖いのだ。“正当防衛”という法律用語もあるのではないか。殺生、殺してはならぬ、殺すことは殺されることと等価……。李芳根は何とも自由である故に、殺されてもいいということがあると思う。あまりにも不自由な人は、その人を殺す権利があるんじゃないかと……。南承之よ、おれが自由だというのは、つまりわがままで勝手ということだろう。それは自由ではない。そう、たしかにあまりに自由すぎて他者を侵し得る人間は、逆説として殺される“自由”を持たねばならぬだろう。それには殺されるのが自由だと意識する偉大な精神と感情が必要なんだ。もっとも不自由な人間がいて、このおれをもっとも自由なる故に殺すとなれば、おれは殺されてもいいな。他者を支配せず、自分のなかに支配する必要のない、権力を追求する必要のない自由の力を持つ。殺人は自由ではない。自由を失うから自殺する。人間は人を殺すまえに、すくなくとも同時に自分を殺さねばならぬのだ。つまり自殺ができる人間は殺人をしない。従ってもっとも自由な人間は人を殺して他者を犯すことをしないだろう。殺すまえに自らを殺して、つまり自殺するってことだから。(『火山島Ⅶ』、1997、371)

李芳根は 4.3 が破局へと向かう混乱の中で、4.28 会談を決裂させた張本人であり、人々を死に追い込んだ張本人である柳達鉉と鄭世容の「私問」を決意する。この時まで彼は「あまりに自由すぎて他者を侵し得る人間は、逆説として殺される“自由”を

持たねばならんだろう。それには殺されることが自由だと意識する偉大な精神と感情が必要だ」と力説し、殺害と自由を分けて考えない。だが、2人の死に関わった後、彼は殺害と自由の連続性はただ観念の中でのみ可能であるという事実を悟る。現実においては殺害と自由は決して同じではない。こうした認識から彼は「自由な精神は殺す前に自殺する」という思想を展開する。

このように、「私問」に対する観念的苦闘から出発し、自由-自殺へと帰結する彼の思想は、論理的完結性が足りない不完全な思想である。この根本原因は彼の思想的出発点である「私問」という行為に内包されている。人間が犯した過ちを断罪するために法の枠組みを離れて「私問」という私的な方法を使用するという発想は多くの争点を含んでいる。そのため、李芳根による「私問」は、それがたとえ時代の要求を代弁する行為だったとしても、道徳的、倫理的な葛藤から自由にはなれないのである。

「私問」をめぐる触発された問いはひとつの結論だけを想定してはおらず、それゆえ、問いに答えるプロセスの中で対話と解釈の開かれた場へと向かうのである。こうして彼の自殺が提起した問いが導く道をたどることは、歴史の不正義に抗いながらも、その方法について絶えず悩み、さらには歴史的責任に対する問いと答えを私たち自らが求めるプロセスに他ならない。われわれはこうした活動を通じて歴史の周縁に置かれた人間ではなく、行為者であり、主

体になりうるのである。

だが、すでに言及したように、歴史に対する誤った断罪としての「私問」の持つ限界は明白である。ゆえに『火山島』の結末への評価はテキスト内部でその可能性をうかがうことから一歩進めて、現実との接点の中でその内容を補完する必要がある。こうしたプロセスを経ることで『火山島』の結末は革命の方法論としてより多くの説得力を持てるのである。そうした意味で『火山島』の結末は、テキスト内部の問題から絶えず現実である今に立ち帰って革命の意味について思惟させる還流点だと言える。

6. むすびに：対話としての『火山島』を読むこと

いま我々が4.3を「革命」と命名しようとする時、1948年の4.3の勃発当時と1988年に『火山島』(1988)が初めて韓国に紹介された時ではその意味が異なることは明らかである。4.3は大韓民国の様々な時代的局面と歴史的文脈が交差する度にその意味を更新してきた。そのため4.3を意味付けするプロセスは、それ自体が多声的対話主義の実現であったと言える。また、『火山島』に現れる4.3の革命的瞬間は、物語の内外を貫く複層的なクロノトープに推動されたものとも言える。

4.3に対する文学の役割は、個々人に想像力を発揮させ、歴史に還元されない多種多様な4.3をめぐる記憶に絶えず向き合わせることである。またこれを通じて倫理や正義という側面から4.3についての思惟を

深めさせることである。そして、それを可能にさせるものこそが対話的状况なのである。

対話的状况の中で4.3をめぐる無数の思惟が巨大な群れを成していく。各々固有の音色を持つ思惟がひとところに集まり、革命という和音を生み出す。こうした力強く豊かな音色が我々を革命の中心へと案内してくれると信じている。こうした革命の生成的側面をハンナ・アーレント式に表現するならば、「革命精神とは新しいことを始める精神であるのみならず、恒久的かつ持続的なことを始める精神のことである」⁽²⁸⁾と言えるだろう。

一方、こうした革命は固定した形態として確定できないという特徴を持つ⁽²⁹⁾。これは日常的価値と秩序が転覆する前衛的瞬間に非日常として出現する。そのため、革命が創り出す一過性で刹那的な時空間を私達のいる場所で継続させていくためには、共同体の成員による絶え間ない参加と関心が必要となる。こうした意味で『火山島』が提示した革命のイメージは、今日の多元的民主主義の原理とも親和性が高い。このように『火山島』は4.3に向き合いながら、共同体の成員が持つべき姿勢を提示するテキストである。

歴史の移行期の正義は、革命を修辭的に反復するときではなく、現在を意味付けし、それをもとに絶えず革命の方向性を模索するとき初めて成就する。したがって、革命後の世界を想像することは我々に残され

た今後の課題だと言える。今われわれは、『火山島』が開いてくれた飛躍の瞬間に、未来のために何をどのようにすべきなのかを問わなければならない。これが今後の持続的な課題であり、そうしたときに革命としての4.3は、定型化された歴史を乗り越え、今、ここ、我々の前に対話として近づいてくるのである。

註

- (1) キム (2007), ナカノ (2001), イ (2003), イム (2017), キム (2007)
- (2) 移行期の正義とクロノトープの融合及び相関関係についての議論はイ・ジェスン⁽²⁰¹⁷⁾の着想によるものである。(イ・ジェスン (2017), 105-148 頁)
- (3) イ・ヨンジェ (2012), 123 頁。
- (4) 金石範はこれについて2017年、第1回「イ・ホ Chol 統一路文学賞」受賞のため訪韓した際に、東国大学の学生との邂逅の折、「当地の若者と共に過ごすことができるととても嬉しい。彼らが当地の希望だ。あなたたちがろうそくデモ(革命)を通じて新政府の誕生に大きな貢献を果たした主役である」と述べた(クォン (2019), 181 頁。)と述べた。金のこの発言を通し、この作家もまた、最近韓国で展開された一連の政治・社会的変化との相関関係の中で4.3に対する認識を展開していることがわかる。
- (5) イ・ジェスン (2017)、前掲書、108-109 頁。
- (6) バフチン (1998)、260 頁。
- (7) 同書、460-466 頁。
- (8) 同書 (1998)、463 頁。
- (9) 同書 (1998)、463 頁。
- (10) 同書 (1998)、49-50 頁を参照。
- (11) 2つのテキストを共に扱った研究にはイ・ナギョン (2016) がある (137-154 頁)。ここでイは『火山島』の2つの韓国語翻訳テキストを比較し、翻訳語を中心に在日朝鮮人作家の言語的特質であるディアスポラ的様相について考察している。
- (12) 金石範、『火山島』第1巻、(1988)、3 頁。
- (13) 『火山島』が初めて翻訳されて韓国に紹介された当時、金石範は朝鮮籍という理由で入国を禁止され、出版記念会に参加することができなかった

- め、書面で自身の挨拶を伝えたが、そこで彼は「5月抗争は「4.3」に対する真相解明、歴史的再照明に拍車をかける歴史の流れを作る原点になったと理解しています」(金石範、『『火山島』について』、『実践文学』第11号、実践文学社、(1988)、45頁)と述べ、光州民主化抗争と4.3を同じ歴史的地平の中で認識している。
- (14) これと関連して金石範は、1998年に開催された済州4.3の50周年記念第2回東アジア平和と人権国際学術大会に参加し、同大会に参加した感想を以下のように述べている。「東アジア学術大会シンポジウムを通じて東アジアの平和と人権への認識が強化されたと言えます。4.3が済州の地域性を脱却し、4.3の普遍化・世界化へと進む出発点となるでしょう。4.3を済州に限定した歴史と捉えるのではなく、世界的な歴史的意義があると考えています」(金石範、『シンポジウム参加への感想』、『東アジアの平和と人権』、歴史批評社、1999、412頁。)このように作家は、4.3が「平和」と「人権」の新たな出発点として位置づけられる可能性についての期待を述べ、さらには世界史の地平の中で抑圧に抵抗し、「自由」を勝ち取るために闘争する「普遍的「革命」としての4.3の性格を強調している。
- (15) 盧武鉉大統領は2003年の『済州4.3事件真相報告書』の確定を記念する大統領談話で、「今後我々は4.3事件の貴重な教訓をさらに昇華させることで「平和と人権」という人類普遍の価値を拡散していかねばなりません。和解と協力でこの地のあらゆる対立と分裂を終息させ、韓半島の平和、ひいては北東アジアと世界平和の道を開かねばなりません」(済州4.3事件の真相解明及び犠牲者の名誉回復委員会、『済州4.3事件に対する大統領の談話文』、『済州4.3事件真相報告書』、ソニン、2003、543-544頁)と述べて「平和」への意思を明らかにした。
- (16) チョン・ホンソプ(2003)、328-348頁；ハ・サンイル(2018)、38-53頁。
- (17) ヘテロトピアとは、到底両立し得ない複数の空間を実在する一つの場所に重ねることで生まれる「存在しながらも同時に存在しない」場所のことであり、現実存在するすべての空間に対して異議を提起し、現実の固定化した秩序を転覆する空間を意味する。(フーコー(2018)、18-24、47-57頁を参照)
- (18) 権力とディスコース、テキスト等の相関関係を
- 通じて歴史を言述する系譜学の説明についてはオ(2013)、306-310頁を参照されたい。
- (19) 内容的に『火山島』の第1部に当たるイ・ホ Chol、キム・ソクヒによる翻訳版、実践文学社版の『火山島』が1988年に韓国に紹介され、その間日本では1986年から1996年まで、『文学界』で『『火山島』』(1986-1996)第2部が連載された。
- (20) イ・ホ Chol(1993).
- (21) イ・ホ Cholが故郷の元山¹⁰⁾から南に向かうまでのプロセスとここから始まる作家の問題意識は、パン(2015)、44-85頁を参照。
- (22) イ・ホ Cholが持つ分断体制と統一への認識は「ひとまず複雑なことを言う必要はなく、自由、自由、自由、自由が最高です。正しいとか、間違っていると、ああだとかこうだとか、そんな事はどうでもいいことなのです。[中略]何ですと？体制？そんな難しい話はやめましょう。今すぐ双方の権力は退き、南北が胸襟を開いて南と北の誰でもたった2日だけ自由に北に、南に行っていよいよと言ってみなさい。どうなるのか」(パン、前掲誌((2015)), 71頁。)と述べる彼の強い語調に深く表れている。
- (23) 金石範・金時鐘(2001)、158頁
- (24) 『火山島』(1988)に対する多くの先行研究が4.3の歴史的真相に対する文学的形象化に関心を傾けたのも決して偶然ではなくこれと関連する研究はパク(2001)、23-37頁；キム(2007)、127-147頁；ソ(1988)、452-465頁；キム(1999)、268-303頁、等がある。
- (25) 1999年に4.3の50周年を記念して出版された『済州4.3研究』の「4.3の「正名」を求めて」というタイトルの〈出版に際して〉は時代的課題としての4.3の正名が求められた状況を象徴する代表的事例と言える。(歴史問題研究所、他編、『出版に際して』、『済州4.3研究』、歴史批評社、1999)
- (26) ナカムラ(2001)、176-177頁を参照。
- (27) 金石範((2015))、第1巻、5頁。
- (28) アーレント(2017)、361頁。
- (29) これは『火山島』で発見した革命の可能性であると同時に限界でもある。これと関連してハンナ・アーレントは、革命は変化と転覆の原理にはなれても、革命によって出現した自由な状態を持続できる政治秩序ではないと指摘する。したがって彼女は革命後の新たな秩序を確立するための原理として、人民の主体的かつ自発的な参加を通じた政治秩序の

確立が必要だと強調し、「新たな政治を建設し、新しい政府の形態について考案する行為は、新たな構造の安定性と持続性に対する深い関心を含んでいる。一方、この重大な任務に関与する人々が持つことになる経験は、人間の開始能力に対する爽快な自覚、新しいものの誕生に常に伴う爽快な気分である」(アーレント、2017、349頁)と述べた。こうしたアーレントの考察は、革命後の世界を想像する上でヒントをくれる。

訳注

- [1] 1947年3月1日を起点として1948年4月3日に発生した武装蜂起と1954年9月21日まで続いた発生した武力衝突と鎮圧の過程で住民が犠牲となった事件であり、米軍政期に発生し、大韓民国の政府樹立以降まで約7年間に渡って続いた韓国現代史上、韓国戦争の次に人命被害が甚しかった悲劇的事件。(済州4.3平和財団ホームページ)
- [2] 朴槿恵前大統領の退陣、憲法の遵守等を求めて起きた社会運動。
- [3] 2014年4月16日に発生した旅客船セウォル号沈没事故。船側、政府、海上警察による初期対応の遅れ、指揮系統の乱れなどにより救助活動が遅れ、死亡、行方不明者は304人に上った。この事件で政府の無能さやずさんな災害対応システムが露呈し、責任の所在が政府にあるとの世論が生まれた。(NAVER知識百科)
- [4] 正しい名前を与えること。
- [5] 1950年6月25日に勃発した「朝鮮戦争」のこと。
- [6] 1948年2月に創設された朝鮮人民軍のこと。
- [7] 韓国戦争と同じ。
- [8] 韓国軍のこと。
- [9] 韓国のこと。
- [10] 今の北朝鮮、咸鏡南道の都市名
- [11] 「植民地時代、皇国臣民として戦場にまで動員した朝鮮人を、敗戦後「外国人」として無権利化する際、外国人登録証明書の国籍欄に記された「地域の総称」である」(中村一成(イルソン)(2017)、『ルポ思想としての朝鮮籍』、岩波書店)
- [12] 1948年から1949年まで日本による植民地時代の親日派による反民族的行為を調査、処罰するために設置された特別委員会。(韓国民族文化大百科)
- [13] 1946年11月創立の反共青年団体。李承晩と米軍

政の支援を受け、左翼勢力制圧の先鋒を担いだ。(韓国郷土文化電子大典)

参考文献

1. 基本資料

- 金石範、キム・ソクヒ、イ・ホチョル訳、『火山島』第1-5巻、実践文学社、(1988).
- 、キム・ファンギ、キム・ハクトン訳、『火山島』第1-12巻、報告社、(2015).
- 、「『火山島』について」、「実践文学」第11号、実践文学社、(1988).
- 、「シンポジウム参加の感想」、『東アジアの平和と人権』、歴史批評社、(1988)、411-414頁。
- 金石範、金時鐘著、文京珠編、『なぜ書き続けてきたかなぜ沈黙してきたか：済州島四・三事件の記憶と文学』、平凡社、2001.
- 済州4.3事件真相究明と犠牲者の名誉回復委員会編、「済州4.3事件に対する大統領談話文」、『済州4.3事件真相報告書』、ソニン、2003.

2. 学位論文

- キム・ジョンヒ、『在日韓国人の文学と現実 - 金石範の作品を中心に』、江原大学修士学位論文、2007.
- ナカノ・マコト、『金石範の作家意識 - 『火山島』を中心に』、高麗大学修士論文、2001.
- イム・ソンテク、『金石範の「4.3小説」研究 - 作中人物の類型を中心に』、全北大学博士論文、2017.

3. 学術論文及び批評

- キム・ドンユン、「金石範に具現された4.3の様相とその意味」、『小さな島大きな文学』、2017、49-79頁.
- キム・ジェヨン、「暴力と権力そして民衆4.3文学その内外の抵抗的声」、『済州4.3研究』、歴史批評社、1999、268-303頁.
- キム・ハクトン、「金石範の『火山島』論 - 親日派と共産主義者に対する認識を中心に」、『韓日民族問題研究』Vol.13 2007、127-147頁.
- 、「民族文学としての在日朝鮮人文学 - 民族文学としての日本語の文章を書くこと」、『日本文学学報』34、韓国日本文化学会、2007、363-386頁.
- キム・ファンギ、「金石範・『火山島』・〈済州4.3〉 - 『火山島』の歴史的／文化史的意味」、『日本学』第41号、(2015)、東国大学日本学研究所、1-18頁。

——、「在日ディアスポラ文学の境界意識と『トランスネーション』」、『横断人文学』創刊号、2018、63-86頁。

パク・ミソン、「『火山島』と 4.3 その内外の声：金石範論」、『外大語文論叢』Vol. No.10、慶熙大学附属比較文学研究所、2001、23-37頁。

ソ・ギョンソク、「個人的倫理と自意識の克服問題」、『実践文学』Vol. 12、実践文学社、(1988)、452-465頁。

イ・ナギョン、「混種性の翻訳様相に対する一考察 - 在日ディアスポラ文学を中心に日本言語文化 36 日本言語文化学会、2010、137-154頁。

イ・ヨンジェ、「履行期の正義における本質と形態に関する研究：空間的定義原理を中心に」、『民主主義と人権』12(1)、全南大学 5.18 研究所、2012、121-151頁。

イ・ジェボン、「パボ（馬鹿）の神話化 - 金石範小説の馬鹿型人物」、『韓国文化論叢』第 34 号、韓国文学会、2003、235-267頁。

イ・ジェスン、「履行期の正義とクロノトープ」、『民主法学』第 64 号、民主主義法学研究会、2017、105-148頁。

チョン・ホンソプ、「虐殺の記憶と真の平和への願い」、『民族文学史研究』Vol. 22、民族文学史学会、2003、328-348頁。

ハ・サンイル、「金石範の『火山島』と済州 4.3」、『今日の文芸批評』、今日の文芸批評、2018、38-53頁。

4. 単行本と雑誌

クォン・ソンウ、『悲情城市に出会った緑豊かな夕方』、ソミョン出版、2019.

キム・ハクトン、『在日朝鮮人文学と民族』、国学資料院、2009.

パン・ミンホ、「わたしが出会ったイ・ホ Chol」、『文学の今日』Vol.14 (2015) 春、(2015).

オ・セングン、『ミシェル・フーコーと現代性』、ナナム、2013.

イ・ホ Chol、『小市民、살 (さつ)』、文学と思想社、1993.

歴史問題研究所、他編、『済州 4.3 研究』、歴史批評社、1999.

ナカムラ・フクジ、ピョ・セマン、他訳、『金石範の『火山島』を読む - 済州 4.3 抗争と在日韓国人文学』、サミン、2001.

ミシェル・フーコー、イ・サンギル訳、『ヘテロトピア』、文学と知性社、2018.

ミハイル・バフチン、チョン・スンヒ訳、『長編小説と民衆言語』、創批、1998.

ハンナ・アーレント、ホン・ウォンピョ訳、『革命論』、ハンギル社、2017.